

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (169)

2025 年 10 月の作品は

『大日本輿地便覧』

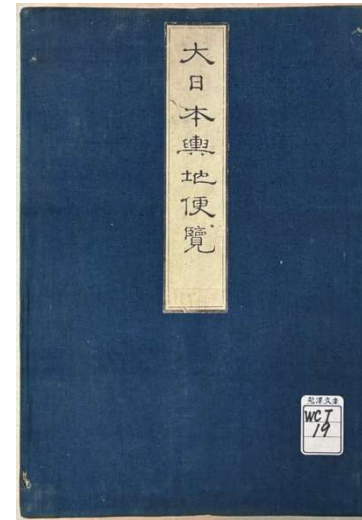
展示テーマ

～昔とのつながりを感じる～

インターネットが普及した現在では、紙の地図を見るという行為は少なくなっているかもしれない。しかし、インターネットがあるはずもない古の時代において、地図という媒体は旅をするときに必要不可欠なものであったことは明らかであろう。鈴木純子氏が『古地図の文化的価値』で述べている通り、過去の地図は当時の空間についての豊富な知識が詰め込まれているものであり、情報伝達の基本的な手段として挙げられる言葉や文字では表しきれない空間的情報を伝える効果的なメディアであると言える。

今回はそんな地図の中でも、当時の空間や地名がより詳細に描かれた、山崎義故によって作られた『大日本輿地便覧』を取り上げる。

この作品とより現代に近い地図との比較を行うことで、古地図の魅力を紹介していきたい。



『大日本輿地便覧』(1冊)

江戸時代、天保5年(1834)

作者：山崎義故^{やまざきよしもと}(1756～1841)

鑄工(彫り師)：松月堂

縦 27cm × 横 19cm

この地図は天保5年に山崎義故によって作られた日本地図である。日本全体が一枚の紙に書かれている地図とは異なり、当時の国別に分けて描かれている点が特徴的である。

山崎義故は現在の三重県に位置する伊勢津の藩士であり、書家でもあった。和漢の学に通じ、1827年に国学者である本居春庭(1763～1828)の門に入り、地誌・歌集等を著し

た。この『大日本輿地便覧』は山崎義故が79歳の時に作られたものである。

『大日本輿地便覧』の序文は伊勢津藩儒である斎藤拙堂(1797～1865)によって書かれており、その内容から山崎義故が斎藤拙堂に序文を書くように直接お願いしていることがわかる。斎藤拙堂は藩主の侍講となり、食禄二百石(一石は当時1人が1年間で食べる量とされていた程度)を賜っていたほどの実力者であった。この2人はともに伊勢津藩士・藩儒という共通点があり、また斎藤拙堂が藩主に支えるほど優秀であったことから山崎義故は斎藤拙堂に序文を依頼したということが想像できる。

展示のみどころ

～詳細な書きっぷり～

『大日本輿地便覧』は令制国(旧国名)68カ国を国ごとにそれぞれ分けて描かれている。ほとんどの国は1葉(見開き1ページ)に描かれているが、出羽国は2葉、陸奥国は4葉で描かれており、最後の世界地図を含め全76葉で構成されている。

冒頭にも述べたとおり、この作品は他の地図では見られないほど各地の地理が詳細に描かれており、国名や主要な河川・山脈はもちろんのこと、それ以外にも寺社の名前や各国にある郡の名前、それよりも小さい町村の名前も書き記されている。町村の名前に至っては、地図全体を覆い尽くすほど詳細に書かれており圧巻である。山崎義故が跋文の最初に「余山水を愛し」と書いているが、そのことがありありとわかる作品である。この作品は色付きで描かれており、■(赤)＝郡名、■(黄色)＝町名、○＝村名、(囲みなし)＝山、川などの自然物、㊦＝神社、(家の記号)＝仏閣、(赤い四角に真ん中

に白い丸)＝主要な城名で表現されている。色や記号を用いてわかりやすく記載している。また、余談ではあるが、出雲国の地図に「佐々木墓」(現在の松江市にある佐々木高綱の墓か)、伊予国の地図に「新田義助墓」(現在の今治市にある脇谷義助公廟か)との文字が書き記してあった。この2つの共通点として挙げられるのは、どちらも源氏から派生しているということであるが、源氏から派生した他の一族(源・武田など)の墓は記載されていなかったことからたまたま共通点があっただけとも考えられる。

このような全国の地図が載っているこの『大日本輿地便覧』から、このリーフレットでは筆者の出身地である但馬国に着目し、現在の地図との比較を行いたいと考えた。市町村合併などによりかつてとは境目が大きく異なってしまったので、市が出来る前の、郡で構成されていた「第三次兵庫県」と比較を行う。



左ページの図は『大日本輿地便覧』の但馬国の地図である。下の図は『大日本輿地便覧』に「第三次兵庫県」の地図を重ね合わせたものである。『大日本輿地便覧』の地図を赤で囲み、「第三次兵庫県」の地図を黒で囲んだ。『大日本輿地便覧』に基づいて上が南(大阪方面)、下が北(日本海側)となっている。

この図からわかるように、実際の地図と山崎義故が自分の手で描いた地図には、形において差異があることがわかる。しかし、図の左側にある出石郡に当たる部分がしっかり出っ張っていたり、郡の境目の線の形がほとんど一致していたりすることから、土地の認識は正しかったということがわかる。

また、この地図から当時の町の名前が現在にもまだ残っていることを知ることができる。例えばこの地図の中に「竹田町」と書かれているが、これは竹田城で有名な竹田として現在もある町であるし、城崎温泉で有名な「城崎」も「城寄郡」としてこの地図の中に確認することができる。

他にも多くの地名が今でも残っており、古地図を見ることで、時代は変わっても、繋がっているのだと再確認できる。『大日本輿地便覧』は、山崎義故の地理に対する愛の深さが窺える詳細な書きっぷりによって、当時の土地の様子を鮮明に現代に伝えることができる資料として重宝される作品である。

参考文献

- ・鈴木純子著『古地図の文化的価値』(『地図』Vol. 44 No. 4 2006) (最終閲覧日 2024/10/14)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjca1963/44/4/44_4_28/_pdf/-char/ja
- ・農林水産省「お米の自給率」 (最終閲覧日 2024/10/28)
https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/ohanasi01/01-03.html
- ・『古典籍総合目録』(岩波書店 1990)
- ・兵庫県 HP 「県域の変遷」 https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk32/pa13_000000013.html (最終閲覧日 2024/10/21)

あとがき ～貴重資料に触れて～

今まで展覧会などでガラス越しに見る機会があったが、今回初めて貴重書に触れてみてその価値がより一層理解できたように思う。200年近く経っているのにも関わらず、綺麗な状態で保管されていることに驚いたと同時に、その貴重さ故なのかと思った。古地図は昔の日本の様子を映す鏡のようなものであるのととても興味深いと感じた。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。

※過去の展示はオンラインでも公開中です!

※第170回展示は令和7年11月上旬からを予定しています。



令和7年10月2日発行

令和6年度 日本文化論B受講生 編集

236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2

横浜国立大学 学術情報センター